

今宵も交番で

か
み
た
に
り
き



人物

愛宕圭介（29）交番勤務

渋谷東子・ありさ（25）キャバ嬢

サラリーマン（55）

老紳士（83）

脚本家（40）

津田沼勝（48）指名手配犯

女性職員（45）老人ホーム職員

夏川（35）巡査

コールセンター主任（38）

東子の恋人（30）

愛宕の母（声のみ）

高校生カップル

女性

巡査

○ 交番・外観（夜）

住宅街に佇む交番。
中から灯りが漏れている。

○ 同・休息室（夜）

薄暗い室内。
床に血痕が点々と続く。
血痕は扉の閉まった物置の手前まで来て、途切れている。

○ 同・洗面所（夜）

警察官の格好をした愛宕圭介（29）、
水道水で勢いよく顔を洗う。
愛宕、顔を上げ、鏡に写る自分の姿を見詰める。
鏡越しにシャツの襟もとに血痕がついていることに気が付く。
愛宕の首筋には引っ搔いて出来た傷がある。
愛宕、ハンカチを水道水で濡らし、襟

もとの血痕を拭き取る。
バイブ音と共に愛宕の制服の胸ポケットが振動する。

愛宕「？」

と、胸ポケットからスマホを取り出す。

画面には『0318001××××』
の電話番号が表示されている

愛宕、溜息を漏らすと、再びスマホを

胸ポケットに仕舞う。

愛宕、鏡で身だしなみを正し、腰の拳

銃に手をやると出て行く。

鳴り続くバイブ音。

○同・詰め所（夜）

壁には日めくりカレンダーがかかって
いて、日付は『9月21日（仏滅）』だ。

愛宕、デスクの前に腰掛け、しっくり
こないのか回転椅子の高さを何度も調
整する。

調整を終え、今度はデスクの上の電話

の位置を微妙に調整。

愛宕「これでよし」

と、電話が鳴り、驚く。

愛宕、鳴り続ける電話を見詰め、生唾

を飲み込む。

愛宕、意を決し電話を取る。

愛宕「お電話ありがとうございます」

と、仕舞ったという顔をする。

愛宕「（慌てて）じゃなくてこちら交番。『中

華料理の泰明軒』？ いや違います。そう、

交番。はい、もう切るよ」

と、受話器を置く。

愛宕「ったく」

と、また電話が鳴る。

愛宕「（受話器を取り）はい」

電話の声「……」

愛宕「もしもし？」

電話の声「……」

愛宕「誰？」

電話の声「……」

愛宕「交番にいたずら電話とはあんたも随分度胸があるね。こっちも忙しいからもう切るよ」

と、受話器を手荒に置く。

女性が入って来て、

女性「慌てた様子で」お巡りさん、ちょっと

来てください！」

愛宕「？」

と、交番を駆け出る。

○住宅街・道路（夜）

サラリーマン（55）、自販機にしがみ

付き、

サラリーマン「かなり酔った様子で」そっち

からぶつかって来ておいて謝りもねえのか、

この木偶の坊！」

と、倒そうとするが自販機はピクリと

もしない。

サラリーマン、自販機から離れ、肩で

息をし、

サラリーマン「うえっ……」

と、餌付く。

サラリーマン「（口の周りを手の甲で拭い）お前、意外といい体してるな。格闘技でもやってたのか」

と、煌々と光を放つ自販機を見る。

サラリーマン「だが、こつちも元ラガーマン

だ。今は腹も出てるがな」

と、自分の出た腹を一叩き。

サラリーマン「花園魂見せてやら！」

と、自販機に体当たり。

しかし、弾き飛ばされる。

愛宕と女性、駆け付ける。

サラリーマン、自販機に向かって何度

も体当たりを試みる。

その様子をスマホで撮影しながら喜ぶ

制服姿の高校生カップル。

愛宕、撮影する男子学生の背後から手

を伸ばしスマホを取り上げる。

男子学生「おい！なに……」

と、愛宕を振り返る。

愛宕、スマホに録画された動画を再生。

自販機にしがみつくサラリーマンの姿

が映し出され、脇から高校生カップル

の笑い声が漏れ聞こえる。

愛宕、動画を消去し、

愛宕「君たち高校生だろ？」

男子学生「だったら何すか？ スマホ返して

下さいよ」

と、愛宕を睨む。

愛宕「（溜息を漏らし）大体君たちね。こんな

時間に出歩いてるのは不良だよ。さっさと

帰りなさい」

女子学生「マジうざっ」

愛宕「（ムツとし）なっ……君のその態度、

どうかと思うけどな」

と、女子高生に詰め寄ろうとする愛宕

の背後から男子学生、スマホを奪い取

ると、

男子学生「おい、行くぞ！」

と、女子学生の右手を引き駆け去る。

愛宕「あ、おい……」

駆け去っていくカップルに、

愛宕「真っすぐ帰るんだぞ！　次、見かけた

ら次は補導だからな」

女性「あの、お巡りさん」

愛宕、自販機に体当たりし続けるサラ

リーマンを振り返る。

女性「ああやってさっきから何度も自販機に

向かって一人で体当たりされてて」

愛宕、困った様子で頭を掻く。

サラリーマン「（自販機に抱きつき）いい加減

観念しろ、この野郎」

愛宕、サラリーマンの肩を叩き、

愛宕「ちよっとお父さん、いい？」

サラリーマン「うっせえな！」

と、愛宕の手を振り払う。

愛宕「その交番で話聞くから」

サラリーマン、振り返ると、愛宕を頭

から足先まで見回す。

愛宕、サラリーマンに険しい顔を向ける。

サラリーマン「（頭を下げ）これはどうも」

と、愛想笑いを浮かべる。

○ 交番・詰め所（夜）

愛宕とサラリーマン、デスクを挟み、向き合って座っている。

サラリーマン、酔い潰れ、デスクに顔

を突っ伏している。

愛宕、調書を手に頭を搔く。

サラリーマン、急に顔を上げ、

サラリーマン「（以下、酔っ払い口調で）海外

支社でブイブイ言わしてたからって、やた

ら横文字ばかり使いやがってよ」

サラリーマン、愛宕の顔を見据え、

サラリーマン「お巡りさん！！」

愛宕「は、はい」

サラリーマン「自分より一回り以上も年の若い上司から偉そうに言われる辛さ、分かり

ますか？」

と、鼻を吸る。

サラリーマン「（氣を取り直し）何だっけ？

ほら、すましたヤツに限って使いたがる横

文字の……あるでしょ？」

愛宕「？」

サラリーマン「イニ何とかっていう……何

だっけな。胃に指圧でもないし」

愛宕「あ、イニシアチブ？」

サラリーマン「そう、それ！馬鹿の一つ覚

えみたいイニシアツ、イニシアツって」

愛宕「いや、イニシアチブ」

と、ボソツと呟く。

サラリーマン「そんなのどっちだっていいの

！こっちは生粋の日本人だったっの。も

っと日本人にも分かる言葉で喋ってたんだ

サラリーマン、デスクに視線を落とす、

サラリーマン「俺はね、高卒で今の会社に入

って、四〇年近く会社の為に身を粉にして

働いてきたんですよ。それはね、大卒のヤ

ツと比べれば確かに学歴は劣るよ。でも、会社に対する思いは若い奴に負けない自信があるんだ」

愛宕「……」

サラリーマン「（鼻を吸り）でも、飲まないとやってらんない時があつてね。ホント、会社員って辛いね」

と、デスクの上に泣き崩れる。

愛宕「（困った様子で）分かったから」

サラリーマン、泣きながら餌付く。

愛宕「うわっ！ 汚いな」

× × ×

愛宕、出口に立ち、前の通りを見ながら背伸びをする。

詰め所の中を振り返ると、サラリーマンが高軒で椅子に凭れている。

サラリーマンにはブランケットが掛けられている。

再び前の通りを振り返ると、電柱の陰から此方を窺う老紳士（83）が目

留まる。

ハットにジャケット姿の老紳士。

白くなった口髭は綺麗に整えられてい

る。

老紳士、愛宕をジッと見詰める。

愛宕「あの、何か？」

老紳士、目を逸らすと、その場を去っ

ていく。

愛宕、首を傾げ、中に戻る。

× × ×

愛宕、デスクに腰掛け、スマホで無料

動画サイトを舐めるように見ている。

動画には犯罪現場に突入するアメリカ

ンポリスの姿が映っている。

愛宕、椅子から飛び上がると、ホルス

ターから拳銃を抜き、構える。

部屋いっぱいを使って動画の突入シー

ンを再現し始める愛宕。

軒が聞こえ、愛宕、椅子に凭れ寝息を

立てるサラリーマンを振り返る。

愛宕、溜息を漏らすと、椅子に腰を下ろす。

再び別のアメリカンポリスの動画を再

生する。

× × ×

愛宕、椅子に座り、臍げに外の通りを

見ている。

人通りはなく、静けさが広がる。

愛宕、大きな欠伸を漏らし、

愛宕「この国はホントに平和な……」

と、前の通りを頭を掻き筆り、ブツブ

ツ言いながら、男（脚本家（40））が

通っていく。

愛宕「？」

暫くしてまたブツブツ言いながら脚本

家が引き返してくる。

○同・前の道路（夜）

脚本家、頭を掻き筆りながら、通りを

蛇行しながら進む。

ヨレヨレのTシャツに短パン、サンダル履きである。

愛宕、脚本家に駆け寄り、

愛宕「ちよっと、その人」

脚本家、訝し気に愛宕を振り返る。

○ 交番・詰め所

愛宕、スマホの動画をジッと見ている。

脚本家、正面に座り、愛宕の反応を窺

う。

動画は中年男三人が一つの部屋で会話

を繰り広げるワンシチュエーションド

ラマだ。

脚本家「どうですか？ 僕が書いた『ヨンブ

ンノイチ』は」

愛宕「どうって？」

脚本家「面白いとか、つまらないとか」

愛宕「最近のドラマは見ないから分からない

けど、こういうのが今はウケるんですんか？」

脚本家「いえ、ちっとも」

愛宕「でしようね」

脚本家、肩を落とす。

愛宕「あ、いや……」

脚本家「いいんです。プロデューサーからも言われました。独身の男が集まって只々、世の中の不満を言い合うだけのドラマ、何が面白いんだって。ペーソスも無ければ、只々暗いだけだって」

愛宕「でも、そもそも何で『ヨンブンノイチ』なの？ 登場人物三人なのに」

と、スマホを脚本家に返す。

脚本家「ふっ、単純だな」

と、鼻にかけて笑う。

愛宕、ムツとした表情で脚本家を見る。

脚本家「あ、失礼。『ヨンブンノイチ』てのはそういうことじゃなくて、生涯……」

と、サラリーマンの寝言が聞こえてくる。

脚本家、気持ちよさそうに寝息を立てる。サラリーマンを見て、苦笑いを浮か

べる。

愛宕「続けて」

脚本家「四分の一は男性の生涯未婚率の割合

です」

愛宕「生涯未婚率？」

脚本家「50歳までに一度も結婚したことが

ない男性の割合が4人に一人つてことでそ

のタイトルにしたんです。でも、僕がタイ

トルに込めた皮肉を誰も理解してくれない

愛宕「(ボソッと)フツーわかんねーよ」

脚本家「視聴率もさっぱりで、テコ入れを要

求されてるんです。でも、全然いいアイデア

アが浮かばなくて」

と、頭を掻き耷める。

脚本家「部屋で書いてたら煮詰まってきた、

散歩でもして気を紛らわさないとおかしく

なりそうだったので」

愛宕「それで。でも、こういう仕事は夢はあ

りますけど、色々大変そうですね」

脚本家「僕、小さい頃からドラマや映画を見

るのが好きで、それでこの道を志したんで
す。見よう見まねで初めて書いた作品が新
人賞に輝いて」

愛宕「へえ、凄いいじゃないですか。中々、初
めてで賞なんて取れませんよ」

脚本家「でしょ？！」

と、身を乗り出す。

脚本家「（頭を搔きながら）いやあ、あの時は
自分でも『俺って天才じゃね』って思っ
たりしたもんです」

と、驚く愛宕を見て、

脚本家「（落ち着きを取り戻し）すみません」

と、椅子に腰を下ろす。

脚本家「プロになったはいけど、それから
が色々大変で。サブではやらしてもらえる
んですけどメインライターとなると中々」

愛宕「……」

脚本家「でも、漸くこの『ヨンブンノイチ』
ていう作品でメインライターになれたんで
す。だから、何としてもこのチャンスをも

のにしたいんです」

脚本家、デスクの上で頭を抱え、

脚本家「しかし、微塵もアイデアが浮かんで

こない！自分で自分がホント、嫌になる

！」

と、デスクに額を何度も打ち付け始め
る。

愛宕「ちょ、ちょっと落ち着いて！」

と、止めに入る。

× × ×

脚本家の額には大きな絆創膏が貼られ
ている。

脚本家の隣にスツキリした表情で座る

サラリーマン。

サラリーマン「(愛宕に)誰？」

愛宕「脚本家の先生」

脚本家「(サラリーマンに)どうも」

と、会釈する。

サラリーマン「脚本家の先生？へえ、どん

なの書いてんの、あんた？」

脚本家、サラリーマンにスマホを手渡し、『ヨンブノイチ』の動画を再生する。

サラリーマン、陰しい表情で動画を見詰める。

脚本家「やっぱ面白くない？」

と、サラリーマンの反応を窺う。

サラリーマン「ぷっ」

と、突然吹き出し、笑い出す。

愛宕、救急箱に絆創膏を戻す手を止め、

愛宕「えっ、マジで？！」

と、サラリーマンを驚きの表情で振り

返る。

サラリーマン「ああ、これ本当に最高」

脚本家「ほ、本当ですか？！」

サラリーマン「ああ、こんな面白いの久しぶ

りに見たよ。あんだ、天才だな」

脚本家「（嬉しそうに）有難うございます」

と、頭を下げる。

× × ×

愛宕と脚本家の二人だけになった詰所。

脚本家「さつきは取り乱してしまつてすみませんでした」

と、頭を下げる。

愛宕「いえ。でも、良かったですね。面白いつて言つてくれる物好きな人がいて」

脚本家「えっ？」

愛宕「じゃなくて、ファンが一人増えて」

脚本家「ええ。でも、何だか笑えてきますよ

愛宕「えっ？」

脚本家「自分が好きで始めたことなのに、気が付けば苦しんでばかり。笑えるでしょ」

愛宕「(ボソツと)好きなことがやれて、不満言つてんじゃねえよ」

脚本家「えっ?!」

愛宕「あ、いや。好きなことを仕事にすると、楽しめなくなるつてあれ、ホントなんです

ね」

脚本家「お巡りさんはそんなことないですか？」

愛宕「うーん、どうだろ」

脚本家「お巡りさんは何で今の仕事に就こう

とと思ったんですか？」

愛宕「えっ、それはその……私の事はいい

じゃないですか」

脚本家「そう言わずに教えて下さいよ、ね」

愛宕「大した理由じゃないから」

脚本家「そう言われると余計気になるな。ね、

お願い。教えて」

愛宕「でも、何でそんなに気になるの？」

脚本家「仕事柄、人に興味があるっていうか、

他人の生い立ちとか凄く気になっちゃうん

ですよ。協力すると思って」

愛宕「仕方ない。警察官になったのはBHC

に懂れて」

脚本家「BHC？」

愛宕「ビバリーヒルズコップ。エディ・マー

フィ演じるアクセル刑事がカッコよくてさ。

映画見たことない？」

脚本家「すみません、未見です」

愛宕「見てないの？！駄目だよ、あれは見
ないと。だから面白い作品書けないんだよ」

脚本家「ですよね」

脚本家、再び額を机に打ち付け始める。

愛宕「冗談だってば！だから一旦落ち着き

ましょ、いいね」

脚本家、額を打ち付けるのを止める。

愛宕「（小声で）面倒臭いのに関わったな」

脚本家の額の絆創膏が血で滲む。

愛宕「そうだ、テーマ曲ぐらいいは聞いた事あ

るんじゃない」

と、スマホからテーマ曲の『アクセル

エフ』を流し、脚本家に聞かせる。

脚本家「この曲、知ってます。何だかテンシ

ョンが上がる曲ですね」

愛宕「でしょ！落ち込んだ時にこの曲聞く

と元気が出るっていうか」

○マッシュ・愛宕の自宅（夜）

消灯された1Kの間取り。

モデルガンやアクセル刑事のフィギュアなどアメリカンポリスのグッズが棚に並ぶ。デスクには警察試験の参考書が並ぶ。デスクの上の壁には『必勝！』と書かれた紙が貼ってある。

○ 交番・詰め所（夜）

一人になった愛宕、壁に貼ってある指名手配犯の顔写真を凝視する。眉間に深い縦皺が刻まれたへの字口の厳つい中年男の写真だ。無精ひげと刈り込まれた短髪が更に厳つさに拍車をかけている。『津田沼勝（48）窃盗・傷害などで前科六犯』とある。愛宕「（頷き）うん、前科六犯も納得の強面」と、壁に余分に刺してある画鋲を抜き取ると、写真の男の両方の鼻の穴に刺す。

愛宕、腕組みしながら鼻の穴に画鋏が刺さった男の写真を見て満足する。

と、交番に一匹の猫が入って来る。

愛宕「どうした？ お前」

猫は鳴きながら愛宕の足元にすり寄って来る。

愛宕「（猫を顔の高さまで抱え上げ）迷子になったのか？」

猫は鳴き声をあげる。

× × ×

皿の中のミルクを飲む猫。

愛宕、その様子を椅子に座り、ぼんや

りと見ている。

と、電話が鳴る。

愛宕「（受話器を取り）はい」

電話の声「……」

愛宕「また、あんたか。一体何？！」

電話の声「……」

愛宕「もう切るよ」

電話の声「……ワシはお前など知らん」

愛宕「はあ？　それはこっちの……」

と、電話が切れる音。

愛宕、受話器を置き、

愛宕「こっちのセリフだっつーの」

猫はミルクを飲む終え、部屋の奥へと

進む。

愛宕「おい、そっちは駄目だ」

と、慌てて猫を追いかける。

×　　　×　　　×

休息室の物置の扉を執拗に爪で搔く猫。

愛宕、猫を発見し、

愛宕「こら！」

と、猫を慌てて抱き上げる。

愛宕、物置の扉に出来た無数の引っ搔

き傷。

愛宕「（猫に向き直り）こんな傷だらけにして。

駄目だろ」

と、猫の頭を軽く押さえつける。

猫は目を細め、鳴き声を上げる。

愛宕、猫を抱えながら出て行く。

× × ×

詰め所に戻ってきた所で、猫は愛宕の腕をすり抜け、外へ走り去る。

愛宕「あっ……」

と、猫が走り去った外の通りを暫く見

詰める。

× × ×

愛宕、デスクを挟み、渋谷東子（25

）と向き合って座る。

東子は胸元が大きく開いたニットワ

ピースを着て、如何にもキャバ嬢とい

った容貌だ。

グラマーなボディラインが目を引く。

愛宕、目のやり場に困る。

東子「（遺失物届書を前に）これって本名書か

ないといけないの？」

愛宕「と言いますと？」

東子「私、本名めっちゃダサイんだよね。だ

からお店で呼ばれてる名前じゃ駄目？」

愛宕「源氏名ってことですか？」

東子「そう。ありさつて言いまーす」

と、名刺を愛宕に差し出す。

東子「お巡りさん、良かったら今度非番の時

に遊びに来て。サービスするからさ」

愛宕、名刺に一瞬目を落とすと、興味

なさげに脇に置く。

愛宕「本名でお願いしますね。財布が見つか

った時に連絡取れないと困るから」

東子「ちえー、つまんないの」

愛宕「ところで財布の中にはいくらぐらい入

ってました？」

東子「えーと、給料前だからそんなには。確

か……三千元ぐらいかな」

愛宕「三千元と」

と、調書に書き入れる。

東子、届書の欄を埋めていく。

愛宕、大きく開いた東子の胸の谷間を

凝視する。

東子「（ペンを走らせながら）そんなにジロジ

ロ見られると書けないんだけど」

愛宕「えっ、あ……」

と、慌てて東子から目を背ける。

東子「顔を上げ」胸見てたでしょ？ いやら

しい」

愛宕「（慌てて）いや、違う。見てない」

東子「そんなに否定しなくてもいいわよ。男

なんてどんなに立派な職業に就いてても、

考えてることは皆一緒なんだから」

愛宕「えっ？」

東子「店にも大勢『先生』て呼ばれてる男の

人が来るけど、結局酒が入れば、今まで何

人の女と寝たとか、そんな下らないマウン

トの取り合いばっか」

愛宕「……」

東子「こういう仕事していると、つくづく男が

下らなく見えてくんのよね。だからこっち

も男に期待してない」

愛宕「（頭を下げ）なんか、すみません……」

東子「でも、心の何処かでは今にもいい男が

颯爽と現れて、今の生活から連れ出してく

れないかなって、そんな淡い期待を持って
たりするんだけどね」

と、欄が全て埋まった届書を愛宕に差し出す。

氏名の欄には『渋谷東子（ありさ）』と拙い字で書いてある。

愛宕「東子さん……」

東子「そう、ダッサイ名前でしょ？」

と、鞆からブランド物のシガレットケースを出し、中から煙草を一本取り出す。

愛宕「東子……うん、凄くいい名前だと思
います」

東子「（軽く笑い）それホント？」

と、煙草を口に銜える。

愛宕「はい！でも此処は禁煙です。東子さ
ん」

と、東子の口から煙草を抜き取る。
休息室の方から『ドンっ』という大きな物音がする。

東子「（愛岩を見やり）今の音、何？」

愛岩「あ、あれはその……猫、そう保護猫

！」

東子「猫？」

愛岩「迷子の猫を今預かってまして」

東子「ふーん。じゃ、その傷もその保護猫に

？」

愛岩「えっ？」

東子「（愛岩の首筋を指し）その首筋の引っ搔

き傷」

愛岩「えっ、あ……まあ」

と、自分の首筋を触る。

東子のスマホが鳴る。

東子「ちよっと、ごめんなさい」

と、電話に出ると部屋の隅に移動する。

愛岩、急ぎ足で休息室に向かう。

東子「（電話に出て）え、今ちよっと……う

ん、分かっている。直ぐ帰るってば！」

と、語気を荒げる。

○ 同 ・ 休息室（夜）

愛宕、無数の引っ掻き傷のある物置の扉の鍵を開ける。
扉を開けると、中からくぐもった声がする。この時点で声の主は見えない。
愛宕、スタンガンを右手に持ち、中のものに押し付ける。

○ 同 ・ 詰め所（夜）

愛宕、戻って来るが東子はまだ電話中。
東子「ごめん、お願いだから機嫌直して、ね」
東子、電話を終え、愛宕に気付く。
東子「彼氏。でも、怒って電話切られちゃった」
と、苦笑い。

愛宕「（残念そうに）彼氏いたんだ……」

と、肩を落とす。

× × ×

愛宕、出口で東子を見送る。

東子「じゃあ、お巡りさんお願いします」

愛宕「分かりました、東子さん。見つかったら連絡差し上げます」

東子「それ、ワザとでしょ？」

愛宕「え？」

東子「さっきからその東子、東子ってやつ」

愛宕「そんなことないですよ、東子さん」

東子「（呆れ顔で）もういいわ。それじゃあ」

と、頭を下げ、交番を出て行く。

× × ×

愛宕、詰め所に戻り、デスクに腰を落とす。

ふと、デスクの端に置き忘れられたブ

ランド物のシガレットケースに目が留

まる。東子が忘れたものだ。

愛宕、シガレットケースを引っ掴むと

慌てて交番を駆け出していく。

○住宅街・路上（夜）

愛宕、東子の姿を探しながら走る。

しかし、人影はない。

愛宕、走るのを止めると、シガレット
ケースに視線を落とす。
愛宕、再び顔を上げ、周囲を見渡すが
人影はない。
愛宕、踵を返し、来た方向へ引き返し
ていく。

○ 交番・前道路（夜）

津田沼 勝（48）、ジャージに雪駄と
いう格好で入口の前を行ったり来たり。

津田沼 は角刈りに、眉間の間に深く刻
まれた縦皺が厳つさを強調している。

愛宕、戻ってきて、

愛宕「（挙動不審の津田沼に）あの、何か？」

津田沼「あんた、此处のお巡りか？」

愛宕「ああ、そうだけど」

津田沼「実は、俺……」

愛宕、落ち着きのない津田沼に不審な
目を向ける

○同・詰め所（夜）

愛宕、デスクを挟み、津田沼と向き合
って座る。

愛宕「自首したい？」

津田沼「ああ」

愛宕「で、どんな悪いことしたの？ 無銭飲

食か何か？」

と、調書を手に取る。

津田沼、掲示板に貼ってある自分の指

名手配の顔写真を指さす。

愛宕「あの写真が何？」

津田沼「あれ、俺だ」

と、指名手配写真が貼ってある掲示板
に近づく。

津田沼、自分の顔写真の鼻の穴に刺さ
った画鋲に気付き、

津田沼「て、誰だ？！ 俺の写真に画鋲刺し
て遊んだのは、あんたか？！」

と、愛宕を睨みつける。

愛宕「いえ、違います」

と、慌てて首を横に振る。

津田沼「まあいいや。兎に角、こっち来てよ

く見てみる」

愛宕、掲示板に歩み寄り、無精ひげを

生やした指名手配犯の写真と綺麗に髭

が剃られた津田沼の顔とを交互に見比

べる。

無精ひげの違いはあるが、どう見ても

同一人物だ。

愛宕、驚いて身構える。

津田沼「どうだ、信じる気になったか？」

愛宕、二度頷きを繰り返す。

愛宕と津田沼、デスクに座り、

愛宕「でも、急に何で？」

津田沼「今日、俺の誕生日なんだよ。48回

目のな」

愛宕、壁にかけてある日めくりカレン

ダーの日付『9月21日』に目をやる。

愛宕、仏頂面した津田沼の顔に視線を

戻すと吹き出す。

津田沼「（笑う愛宕に）な、何がおかしいんだよ？」

愛宕「いや。こんな厳ついのにあんた、おとめ座なんだね」

と、笑いが止まらない。

津田沼「うるせえよ！　悪かったな」

と、顔を赤らめる。

愛宕「（笑いを堪え）ごめん。続けて」

津田沼「ふと、これまでの人生を振り返った

わけだ。そしたら情けねえ事に、ガキの頃

から悪いことしかしてねえことに気付いて

よ」

愛宕「……」

津田沼「俺みたいな人間が後何年生きられる

か分かんねえけどよ。このまま人生終わっ

てそれでいいのかって。やり直すならこれ

が最後のチャンスじゃねえかって、そう思

ったわけだ」

愛宕「……」

津田沼「それにこんな生き方にはもう疲れた。

だから逮捕してくれ」

と、頭を下げる。

愛宕、頭を下げる津田沼をジッと見て、

愛宕「それはちよつと……無理かな」

津田沼、顔を上げ、

津田沼「はあ？　何でだよ？！」

愛宕「何でって、その……」

愛宕、ふと日めくりカレンダーの『仏

滅』の文字に目がいく。

愛宕「仏滅……そう、仏滅！」

津田沼「？」

愛宕、日めくりカレンダーを指さす。

津田沼も日めくりカレンダーを見る。

愛宕「ね、日が悪いよ。こういうことはやつ

ぱり大安の方がいいんじゃないかな」

津田沼「こっちは何も結婚式挙げようって言

ってんじゃねえんだ！　自首するのに大安

も仏滅もあるかよ！」

愛宕「それはそうだけどさ」

と、拗ねる。

津田沼「じゃあ、逮捕してくれ」

愛宕「そこまで言うなら」

津田沼「ああ、早くしてくれ」

愛宕「（溜息をつき）やっぱり明日じゃ駄目？

昼間とか」

津田沼、愛宕に呆れた表情を向ける。

愛宕「いや、一日寝たら気が変わるこつて

よくあるじゃん。止めときゃ良かったつて

後悔しない？」

津田沼「しない、しない！俺の気持ちとは絶

対に変わらない！」

愛宕「弱ったな」

と、頭を搔く。

愛宕「そうだ！この近くに警察署あるから、

そつちに行つてくれないかな」

津田沼「はあ？！あんたさつきからふざけ

てんのか！」

愛宕「別にふざけてはないけど」

津田沼「もういいよ！」

と、椅子から立ち上がり、ブツブツ言

いながら交番を出て行く。

愛宕、津田沼の姿が見えなくなると、

胸を撫で下ろす。

と、津田沼が出口から顔を出し、

津田沼「あんた、本当に警官か？」

愛宕「あ、当たり前じゃないか」

津田沼「ふーん」

と、愛宕を訝し気に見る。

愛宕「な、何だよ」

津田沼「いや、俺みたいに長年警察にお世話

になつてると、匂いでそいつが警官かどうか

か嗅ぎ分けられるっていうか」

と、愛宕の全身を舐めるように見る。

津田沼「でも、あんたからは警官の匂いがし

ないんだよな。それに……」

と、愛宕をジッと見る。

愛宕、気まずそうに視線を逸らす。

津田沼「あんた、人から変わってるってよく

言われるだろ？」

愛宕「（視線を落としたまま）……」

津田沼「ホント、変わったお巡りだ」

と、呆れた様子で交番を後にする。

× × ×

愛宕、椅子に腰掛け、東子の遺失物届

書をジッと見ている。

ふと、顔を上げると、入口で老紳士が

此方を睨みつけ、立っている。

驚く愛宕。

老紳士、足を踏み鳴らし愛宕に詰め寄

ると、愛宕の胸倉を掴む。

愛宕「な、何ですか？」

老紳士「(愛宕に顔を近づけ)わしはお前など

知らん」

愛宕「は？！こっちだって：：うん？

その声は電話の：：それにアンタ、さっ

き電柱の陰からこっち見てたろ」

老紳士「いつものお巡りさんは？！」

愛宕「何を言ってるんだ。この手を放さない

と公務執行妨害で逮捕するぞ」

女性職員(45)、慌てて入ってきて、

女性職員「何やってんの？！駄目でしょ」

と、老紳士を愛宕から引き離す。

愛宕「（襟元を正しながら椅子から立ち上がり

）これは一体何ですか？」

女性職員「すみません。施設から勝手に抜け

出したと思ったらこんな所でご迷惑をお掛

けして」

愛宕「施設？」

女性職員「あ、私この近くにあります特別養

護老人ホームの職員です」

老紳士、愛宕に興味が無くなったのか

交番内を物色しだす。

愛宕、訝し気に女性職員を見る。

女性職員「認知症の患者さんで。夜な夜な施

設を抜け出すんで困ってるんです」

愛宕「認知症？」

と、洒落た格好をした老紳士に訝し気

な目を向ける。

女性職員「認知症になる以前はお洒落が好き

な方だったと聞きました。出かける時にお

洒落することだけは今も覚えてるみたいで

愛宕、老紳士が交番内をうろつく姿を

ジッと見る。

女性職員「さつきは本当にすみませんでした。

本人に悪気は全くないんです。だからどう

か逮捕だけは」

と、頭を下げる。

愛宕「あ、いや。そういうことでしたら」

× × ×

愛宕、出口で老紳士たちが帰っていく

のを見送る。

老紳士、女性職員に付き添われながら、

老紳士「あの男はお巡りじゃない。アイツは

偽物だ」

女性職員「またそんなこと言って、失礼でし

よ！」

と、愛宕を振り返り、気まずそうに頭

を下げる。

愛宕、頭を下げ返す。

老紳士「今夜は夏川巡査が勤務のはずじゃ」

女性職員「はいはい、分かったから」

愛宕、慌てて交番の中へと消える。

○同・休息室（夜）

愛宕、物置の中をジッと見詰める。

物置の中には両手足を縛られ、猿ぐつ

わを嵌められた下着姿の夏川（35）

の姿がある。

夏川は気を失いぐったりしている。

× × ×

詰め所には誰もいない。

デスクの上に綺麗に畳まれて置かれた

警察官の制服一式。

○河川敷（夜）

鉄道橋が架かる一級河川。

愛宕、私服姿で土手に座り一枚の紙を

ジッと見ている。

愛宕、スマホを取り出すと、『031

8001××××』からの着信履歴が

何件も残っている。

愛宕、「母」というアイコンの連絡先

を選択する。

発信音が鳴り出す。

愛宕の母の声「はい、もしもし」

愛宕「ごめん。寝てた？」

愛宕の母の声「どうしたの、こんな時間に？」

愛宕「（暫くの沈黙の後）俺……」

と、言葉に詰まり肩が震え出す。

愛宕の母の声「圭介、何かあったの？」

愛宕「（鼻を吸り）いや、何もないよ。只、急

に声が聞きたくなって」

愛宕の母の声「何よ、変な子ね。そう言えば

警察試験の結果、どうだった？ 今日じゃ

なかった？」

愛宕「いや、違うよ」

愛宕の母の声「そう。今年はきっと大丈夫よ。

何年も諦めずに頑張ってきたんだから」

愛宕「そうだといいいけど」

と、手に持った紙に目を落とす。

紙には『警察試験の結果 不合格』とある。

愛宕の母の声「合格したら盛大にお祝いしな
いとね」

愛宕「ああ」

と、電話を終える。

電車が鉄道橋を渡る音が響き渡る。

愛宕のスマホが鳴る。

画面には『0318001××××』

の番号が表示される。

愛宕、渋々電話に出る。

○コールセンター・中（夜）

電話の音が引つ切り無しに鳴る。

インカムをした従業員がパソコン画面

を前に電話応対をしている。

コールセンター主任（38）、スマホ片

手にオフィス内を進む。

電話口から、

愛宕の声「はい」

主任「漸く出たか」

愛宕の声「……」

主任「何やってんだよ、お前！ 連絡もなし

に無断欠勤しやがって。こっちはお前の穴

埋めるのに天手古舞だ」

と、忙しそうにするオフィス内を見渡す。

主任「お前も社会人だったらもう少し自覚持てよ。大体、前からお前ふざけたところある

よな」

愛宕の声「……」

主任「大して仕事も出来ねえくせによ」

愛宕の声「……」

主任「な、聞してる？ クビになってもいい

の？ 何ならこの場でクビにしてやろうか

？」

愛宕の声「……（呟くように）うつせえな」

主任「（その場に立ち止まり）おい、今なんつ

った？！」

愛宕の声「だからうつせえんだよ！！！」

主任「お前、ふざ……」

と、電話が切れる音。

主任「くそ……」

近くの従業員が訝し気に主任を見る。

主任、気まずそうに歩き出す。

○河川敷（夜）

愛宕、土手に座り、スマホを切ると、

愛宕「（ボソッと）うつせえよ……」

と、膝を抱き、顔を膝に埋める。

愛宕の背中が次第に震え出す。

× × ×

川面に細かく破り捨てられた紙片が浮

かぶ。

愛宕、シガレットケース（東子の）を

手に土手に座っている。

立ち上がると、その場を後にする。

○東子の自宅アパート・外観（夜）

二階建ての建物。

○ 同 ・ 二階の東子の部屋・前（夜）

愛宕、遺失物届書を手に佇む。

インターホンに指を掛けるが、思いと

どまりその場を後にしかける。

と、部屋のの中から物が割れる音と、

東子の声「お願い、止めて！」

と、泣き叫ぶ声。

○ 同 ・ リビング（夜）

東子の恋人（30）、東子の髪を掴み、

壁に叩きつける。

東子、顔を強打し、その場に鼻を押

さえ蹲る。

床に血が滴る。

愛宕、入ってきて、

愛宕「（東子に駆け寄り）大丈夫ですか、東子

さん？！」

鼻を両手で押さえる東子に、

愛宕「どれ、見せて」

東子、両方の鼻の穴から出血。

愛宕、恋人を振り返り、睨みつける。

恋人「何だ、お前？」

愛宕「（立ち上がり）女に暴力振るなんて最低

だな、お前」

恋人「はあっ！」

と、愛宕に掴みかかる。

揉み合いになる二人。

恋人、愛宕を床に組み臥すと、馬乗り

で愛宕の顔を何度も殴りつける。

愛宕、意識が遠のいていく。

東子「止めて！！死んじゃうよ」

と、愛宕を殴ろうとする恋人を止め

入る。

恋人「うっせえ！！」

と、東子を殴り飛ばす。

床に頭を打ち付け、蹲る東子。

愛宕「うわあああ！！」

と、東子の恋人を床に倒すと、何度も

殴る。

愛宕「お前みたいな最低なヤツはな……」

と、拳銃を取り出し、銃口を東子の恋人の口に押し込む。

愛宕「俺が殺してやる！」

と、引き金に指をかける。

東子「もう止めて！！」

愛宕、引き金から指をはなし、東子を振り返る。

東子「（愛宕を睨みつけ）もう十分。もう出てって」

愛宕「東子さん……」

東子「いいから出てって！」

愛宕、力なく立ち上がり、東子の恋人から離れる。

東子、倒れる恋人に駆け寄り、東子「（涙を浮かべ）可哀想に。痛かったね」

と、傷だらけの恋人の顔を触る。

愛宕、部屋からそつと出て行く。

○別の交番・詰所（夜）

愛宕と巡査、机を挟み座る。

巡査「警官に憧れて近くの交番を襲った？！

それ本当？」

と、半信半疑の巡査。

愛宕、拳銃を机の上に置く。

巡査、驚く。

巡査、拳銃を手に取り、一通り物色。

巡査「拳銃を机に置くと」詳しい話聞かせて

もらえる？」

愛宕、話し始める。

（了）